様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２６６８

研究課題名（和文）ドイツ語「結果構文」のコーパス分析と使役構文を含む「結果表現」の包括的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study of resultative expressions including corpus analysis of resultative and causative constructions in German

研究代表者
カン　ミンギョン（Kang, Minkyeong）

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：３０５１０４１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：結果構文には、語彙的に結果状態を含意している動詞によるもの（本来的・弱い結果構文）と、語彙的に結果状態を含意しない動詞と他の結果述語との結びつきによるもの（派生的・強い結果構文）がある。後者の場合、具体的にどのような動詞と結果述語の結びつきが結果構文を形成し、またそれらが実際の言語使用においてどのように用いられているかを分析することが重要である。本研究では、コーパスデータを用いて、結果構文を形成する「動詞＋結果語句（主に形容詞の場合を例に）」を分析し、関連構文も含めて考察を行った。さらに、結果構文と使役構文の接点を捉え、両構文の相互関係を記述することを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
結果構文については従来、作例と内省に基づく理論的研究を中心に行われてきたが、本研究では大規模コーパスを用いてコロケーションの観点から、ドイツ語の結果構文を形成する「動詞＋結果述語」を調査・分析を行った。これにより、実際の言語使用におけるコロケーションの観点から、結果構文の使用実態の一部を具体的に明らかにすることができた。また、関連表現・構文に関する新たな問題提起を示すことができた。これは方法論的に、コーパスデータを用いた構文分析の新たな可能性を示すものである。

研究成果の概要（英文）：Resultative constructions can be broadly classified into two types; "inherent/weak resultative constructions" with a main verb that entails the final state of an event and "derived/strong resultative constructions" formed by the a combination of a main verb that does not entail the final state and a resultative secondary predicate. In the latter case, it is important to know what kinds of combination of verbs and resultative phrases are used in language use. In this research, using date from the Mannheim German Reference Corpus (DeReKo), I examined the usage of resultative constructions with adjectival resultative predicates in German. Furthermore, I tried to describe the relationship between resultative constructions and causative constructions in German.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：結果構文　使役構文　コロケーション

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「結果構文（resultative constructions）」は、原因となる行為（動詞；一次述語）とそれによる結果（形容詞または前置詞句；二次述語）という２つの事象を単一の節内で表す構文である。従来の研究は主に英語を中心に、結果構文のメカニズムに関する研究、動詞の統語的・意味的特性による結果構文のタイプ分類などが行われてきたが（Goldberg 1995; 影山 1996; Washio 1997 など）、近年では様々な個別言語の研究はもちろん、言語間の対照研究や類型論的な観点からの研究も盛んである（小野 2007, 2009）。

ドイツ語の「結果構文」にも、(1)のような語彙的に結果状態を含意する動詞による「本来的・弱い結果構文」と、(2)や(3)のように結果を含意しない動詞による「派生的・強い結果構文」がある。

(1) Er riss den Brief in tausend Stücke.
(2) Sie schwamm ihren Badeanzug in Fetzen.
(3) Das Baby weinte das Kissen nass.

後者の場合、具体的にどのような行為とどのような結果の組み合わせが可能なのかが問題となる。これまでは作例を用いた理論的研究が中心であったが、今なお残っている諸問題を解決するためには、幅広いデータ分析に基づく検証と、使役構文との相互関係も含めた「結果表現」全体の中での「結果構文」としてその位置づけを見直す必要がある。

また、次の(4)のような結果述語を伴わない状態変化動詞と、(5)のような lassen 使役構文や(6)のような使役の機能動詞結合などの分析的使役構文も広い意味でのドイツ語の「結果表現」に含まれる。

(4) Er zerbrach das Glas.
(5) Sie ließ das Obst verderben.
(6) Das Kind brachte die Luftballons zum Platzen.

すなわち上記の文はいずれも、(7)のような「使役」の意味構造を有している点で共通している。
(7) [X CAUSE [Y BECOME Z]] (BY X V Y)

通常、(1)と(4)は「語彙的使役」、(5)と(6)は「分析的使役」とそれぞれ呼ばれ、「使役構文」として扱われる。一方、(1)は「本来的・弱い結果構文」、(2)と(3)は「派生的・強い結果構文」とそれぞれ呼ばれ、「結果構文」として扱われる。すなわち、(1)のような状態変化動詞（語彙的使役動詞）の文は使役構文と結果構文の両方に関連して取り上げられるが、個々の状態変化動詞の結果述語との結合有無を含めて、両者の区別は曖昧である。また、(2)(3)と(5)(6)の関係については、これまで十分に議論されてこなかったように思われる。それは、使役構文と違って結果構文の場合、コーパスに基づく実例分析が容易ではなく、理論的研究に留まっていることにもその一因があると考えられる。以上のような流れの中で、ドイツ語における結果表現の全体像を明らかにするためには、結果構文の大量のデータに基づく実例分析と、状態変化動詞－分析的使役構文－結果構文の３つの表現形式間の相互関係を明らかにする必要があるとの考えに至った。

２．研究の目的

「結果構文」の研究においてもっと基本的かつ重要な問題は、どのような動詞とどのような結果述語の組み合わせが結果構文を形成するかという点である。一方結果構文は、コーパスデータの収集が容易でないこともあり、これまでの研究は作例中心の理論的議論を中心に行われてきた。そこで本研究では、コーパスを用いて結果構文を形成する「動詞＋結果述語」をコロケーションの形で抽出・分析することによって、既存の理論的研究の成果を検証するとともに、結果構文の言語使用上の実態を明らかにすることを目的とした。また、使役構文と関連づけて結果構文を捉えることで、ドイツ語における結果表現の全体像を記述することを目指した。

３．研究の方法

結果構文のコーパス分析は、ドイツ語参照コーパス（Das Deutsche Referenzkorpus: DeReKo）を用いて、以下の手順で進めた。まず、コーパスデータの収集方法や分析手順を検討した。結果構文では動詞（一次述語）と結果述語（二次述語）が離れて現れることが多いため、コーパスデータの収集は容易ではないとされるが、定動詞が後置される副文を調査の対象とすることで、この問題を解決することができた。次に、データ収集の対象を選定し、データベースを作成した。結果述語には形容詞と前置詞句があるが、本研究では主に結果形容詞を検索語とし、当該の形容詞と結びつく動詞を調査する形で、結果構文を形成する「動詞＋結果述語」のデータを収集した。次に、結果述語（ここでは主に形容詞）ごとに「動詞＋結果述語」の意味タイプの抽出し、他動詞構文・自動詞構文・再帰構文の区別、さらに結果構文の主語・目的語の名詞も含めた分析などを行った。

４．研究成果

結果構文には結果状態が形容詞で示される場合と前置詞句で示される場合があるが、本研究では主に前者を対象に、ある形容詞がどのような動詞と結びつき、どのような意味タイ

プの結果構文を形成するのか、コーパスを用いて調査・分析した。調査の結果、様々な動詞と結びつき様々な意味タイプの結果構文を形成する形容詞もあれば、結びつく動詞が非常に限られている形容詞もあることがわかった。また、結びつく動詞によって、形容詞が「結果」の意味で解釈される場合もあれば、「状態・様態」の意味で解釈される場合もある（den Teller leer essen [（料理を）食べてお皿を空にした] / einen Laden leer mieten [お店を設備などが何もない状態で借りた] ）。

ここでは、分析の具体例として kaputt を取り上げる。形容詞 kaputt の場合、(A1)状態変化動詞や(A2)接触打撃動詞と結びついて本来的結果構文を形成するもののほかに、様々なタイプの派生的結果構文が生産的に用いられていることが確認された。他動詞構文を形成するものとして、(B1)管理動詞と結びつく場合と(B2)活動動詞と結びつく場合、再帰構文を形成するものとして、(C1)活動動詞と結ぶつく場合と(C2)状態動詞と結びつく場合などがある。(B)(C)タイプは、動詞の語彙的意味からすれば kaputt との結びつきは考えにくいが、動詞の表す行為が過度に（übermaessig）行なわれるかまたは当該の状態が長く続くことによって対象が kaputt の状態になることを表すものである。人主語再帰構文を形成するものの中には、結果状態としての kaputt の意味は薄れ、基礎動詞が表す行為を強調する意味として用いられるものもある。なお、(C2)タイプの物主語再帰構文は、頻度的にはごくわずかであるが、状態動詞は結果形容詞と共起しないとする先行研究（Hoekstra 1992: 161 など)との関連で興味深い事例として観察された。これは今後の課題の一つである。また、結果述語が前置詞句で示される結果構文のコーパス調査や、結果述語が形容詞の結果構文と結果述語が前置詞句の結果構文の意味論的相違、さらに使役構文と結果構文の相互関係についても、引き続き取り組んでいく必要がある。

参考文献

Goldberg, Adele (1995): *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.［河上哲作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子（訳）（2001）『構文文法論――英語構文への認知的アプローチ――』東京：研究社出版.］

Hoekstra, Teun (1992): Apect and Theta Theory. In: ROCA, I.M. (Hsg.): Thematic structure. *Its role in grammar*. Berlin/New York: Foris Publications, 145-174.

影山太郎（1996）:『動詞意味論―言語と認知の接点』、東京：くろしお出版.

小野尚之（編）（2007）:『結果構文研究の新視点』、東京：ひつじ書房.

小野尚之（編）（2009）:『結果構文のタイポロジー』、東京：ひつじ書房.

Washio, Ruichi (1997): Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics 6*, 1-49.

コーパス

https://www1.ids-mannheim.de/kl/projekte/korpora/
https://cosmas2.ids-mannheim.de/cosmas2-web/

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 井口靖、恒川元行、成田克史、黒田廉、カンミンギョン	４．巻 4
２．論文標題 コロケーションと独和辞典の記述ーコロケーション活用の可能 性と限界ー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 三重大学教養教育院研究紀要	６．最初と最後の頁 73-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 井口　靖／恒川　元行／黒田　廉／成田　克史／カン　ミンギョン	４．巻 3
２．論文標題 ドイツ語におけるコロケーション分析とその辞典記述の問題点	５．発行年 2018年
３．雑誌名 三重大学教養教育機構研究紀要	６．最初と最後の頁 51-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 カンミンギョン
２．発表標題 形容詞を伴う不変化詞動詞と結果構文ー形容詞kaputtを伴う場合を例にー
３．学会等名 ワークショップ「構文の使用と意味」
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考